

6月(七)、ま~ど！ 倫理者です。心地よい季節となりました。皆様いかがお過ごしですか？ 親祖先からへりへりして名前を教わる意識はありますか？

今週の倫理 1032号 改めて感謝するに有難い。

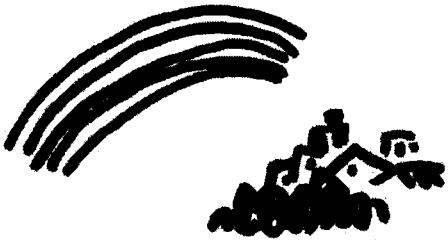
2017.6.3 ~ 6.9

六月のテーマ 本(もと)を忘れず

名字の自覚

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二二—一九九九）のことばを掲載します。

アホー鳥
幸せ運が



え・浅妻健司

私たちの身体や精神は、自分自身がどこからか材料を仕入れてきてつくりたものではなく、親、父母、曾祖父母と、代々受け継いで頂いてきたものである。よって名字は自分が勝手につけられず、また法律上も勝手に変えることができない。祖先からの魂と血と、伝統の自覚をうながす貴重なもののが、この名字なのである。

どうしてこのような名字になったのかは、すぐに分かるものと、なかなか分からぬものとがある。明治八年にすべての国民に名字をつけよとの布告が出され、あわてて家のまわりに小さな石があつたので小石とつけたというものがいる。牛や馬がいたので、牛田とか馬場とか、その場で決めてしまつたというものもあるという。

たちは、名字を案外粗末にしているのではなかろうか。名字は自分の生命のつながりとう親祖先からの積み重ねを表すものであるにもかかわらず、まったく無関心であつたり、中にはいやな名字だと思つていてたりする。

私たちの身体や精神は、自分自身がどこからか材料を仕入れてきてつくりたものではなく、親、父母、曾祖父母と、代々受け継いで頂いてきたものである。よって名字は自分が勝手につけられず、また法律上も勝手に変えることができない。祖先からの魂と血と、伝統の自覚をうながす貴重なものが、この名字なのである。

どうしてこのような名字になつたのかは、すぐに分かるものと、なかなか分からぬものとがある。明治八年にすべての国民に名字をつけよとの布告が出され、あわてて家のまわりに小さな石があつたので小石とつけたというものがいる。牛や馬がいたので、牛田とか馬場とか、その場で決めてしまつたというものもあるという。

どうしてそういう名字になつたか、わけは分からなくても、それをよいように解釈すれば、生活に支えができる。悪山という人がいた。それは自分をへりくだつて称したものだ。自分から善人ぶるよりも、はるかによい名字である」と言われて、心がすつきりし、人に對して威張らないよう、高ぶらぬよう、迷惑をかけないようつとめてきたところ、次第に信用を増して、事業も栄えるようになつた。

陰間という人は、かげの間にいるとは何とゆううつなことだろうとおもしろくなかった。ところがある易者から「陰とは静、柔軟などを意味するので、おだやかに暮らしていると必ず財産をたくわえられる」と聞き、怒らずあわてず、心を落ち着けて働いていたところ、実際にそのようになつて驚いたといふ。

「じつけだと非難してはならない。よいように解釈すると、物事はそうなるのである。妙な字のよ

うしても、善意によいように受けて、そのように自覚してゆけば、実生はそうなるのである。

あまりに姓名がよすぎると、かえつて負けてしまい悪くなることがある。よすぎるというのは一方的な言い方だが、實際はいい気になつたのだ。自分から善人ぶるよりも、はるかによい名字である」と言つたり、嫁にいつたりして姓が変わると、その家の伝統を受け継ぐ。性格も次第に変わり、健康、不健康の点まで受け継ぐ。そういう家の自覚に立つからである。

ある藤原さんは、自分の祖先は藤原鎌足で、代々続いて支配者であったことが自慢である。何かにつけて古い系図を持ち出して得々と喋る。また始まつたと次第に敬遠する人が増えて、ついに孤独で貧しい暮らしに落ちてしまった。これは一種のうぬぼれに依るものであろう。とにかくまず自分の名前を改めて自覚し直すことである。

『丸山竹秋選集』より